

# 音楽と造形の表現理解についての研究

～ 替えうたと手作り楽器の実践～

杉本 亜鈴・郡司 敦\*

## 1. 研究目的

本研究は、保育者養成機関である本学の授業におけるひとつの問題解決方法を模索することから始まった。

保育者養成機関における音楽や造形といった表現分野の授業では、幼児の興味・関心・意欲をどのように引き出し高めていくかが指導法の重要なポイントとして扱われている。これは子どもの表現活動の成果に直結することによるものであり、「表現するよろこびを味わうことができたか」「発展的な展開があったか」「表現の技術を身につけることができたか」「他者の表現を感受することができたか」といった保育・幼児教育の現場における表現活動の成果が、子どもたちの活動に対する動機付けに大きく影響を受けることを示している。

一方で、授業における課題を学生たちは心から感動したり楽しんだりすることができているのか、という動機付けの問題がある。授業という到達目標を明確に設定された環境にあって学生は本当に表現のよろこびを得ることができるのか、また、授業として「表現すること」を半ば強制された状態で感動を他者に伝えることが可能なのかといった問題については、まだまだ検証と改良の余地が残っていると考えている。

反面、後述の授業内で行ったアンケートの回答に見られるように、学生たちの「子どもたちの成長を支援したい」「保育者としての知識や技術を身につけたい」という気持ちは純粋で強いものである。また、授業改善の一環として毎年行われている授業アンケートの結果からは、学生たちが授業の学びの内容や保育技術の修得に満足していることがうかがえる。このような現状にあり、本研究は「学生が自発的な欲求をもって表現の課題に取り組むための環境をつくる」ことに実験的に取り組んだものである。

子どもが日々の生活の中で様々な発見をし、その驚きや感動を誰かに伝えたいと思うとき、保育者は子どもが感動を人に伝えるための手助けをする必要がある。その役割を担うためには「感動すること」や「感動を人に伝えること」を、学生自身が身をもって経験する必要があるのではないだろうか。こういった機会を授業の中で模擬的に再現することはできないだろうか、と考え基礎研究としての実践をスタートした。

授業において学生自身が楽しむことを課題として取り上げたとき、その感動を表現に対する意欲へと向上させるサイクルへの転換が難しいと感じている。つまり「楽しかった」で終わらない課題、「楽しかったからもっと続けたい」「子どもたちに伝えていきたい」と学生たちが継続して行動していける課題が必要であると考えたのである。

---

\*1 東京成徳短期大学非常勤講師

授業の中で音楽の創作活動と造形の制作（※1）活動を行い、自発的な表現を喚起し、表現に対する意欲を向上させることを目的とするなかで、今回我々が着目したのは、既存の作品の「模倣」と「改変」による課題導入の平癒化であり、具体的には童謡の替えうたを手作り楽器の演奏によって発表するという活動である。これは既存の童謡や楽器の魅力を活かすことによって音楽や造形の持つ、技術の修得と創作の苦しみといった側面を避け、学生たちが苦手意識を持つことなく、親しみ易いかたちで感動や深い表現理解に向かっていける課題を授業内で実践していこうとする試みである。

## 2. 実践方法

(1)実践対象：東京成徳短期大学 幼児教育科 1年生

【基礎音楽】（担当：郡司）および【保育内容研究（子どもの育ちと表現・造形）】（担当：杉本）の受講学生（各年度96名）を対象とした。

(2)実践期間：平成22年度および23年度の後期授業

(3)実施の概要：【基礎音楽】（担当：郡司）

- ①全学生に広く親しまれている童謡「しあわせなら手をたたこう」（※2）の一部をモデルとして、学生一人につき一つずつ替え歌を作ることを伝える。
- ②原曲である「しあわせなら手をたたこう」の歌詞の内容に対する理解を深めるため、【アンケート1】を実施する。
- ③学生全員の作った替えうたを、内容別の一覧表にして全員に配布する。
- ④自分で作った手作り楽器を演奏しながら替えうたを歌う。
- ⑤他の学生が作った替えうたの歌詞についての【アンケート2】を実施する。

(4)実施の概要：【保育内容研究（子どもの育ちと表現・造形）】（担当：杉本）

- ①音楽の授業で作る自分の替えうたを伴奏する楽器を作ること、また、以下②～⑥の条件満たす楽器を作ることが課題であることを伝える。
- ②廃材や、一般に手に入り易い安価な材料を使用すること。
- ③30分程度で簡単に作れるものであること。
- ④楽器の種類は何でも良いが、自分の替えうたの歌詞のイメージに沿ったものであること。
- ⑤子どもにとって安全であること。
- ⑥子どもが見て「演奏したい」と思うようなワクワクする工夫を施すこと。

(5)各活動のねらい

①替えうた作り

本来、音楽作品を創作するには、作者が心をゆり動かされた経験をしている必要がある。子どもでも大人でも感動する経験は同じようにあり、また、それを人に伝えたいという気持ちは自然に起こるものである。その心の動きを原動力にして作品を創作する事で、感動を再認識し、自分以外の人と感動を共有する事ができると仮定する。

本実践活動ではこの仮定を前提として、学生が替えうた作りによって「作品を創作すること」を模擬的に体験することの意義を、作られた替えうたと、その過程で行ったアンケートの分析によって考察する。

保育者養成機関に在学する学生や現職の保育者たちは既存の童謡を歌うが、童謡を歌うことに対して彼らがリアリティを感じているかという点、必ずしもそうではない場合があると感じている。本当の意味で子どもと童謡を歌うためには、既存の曲にある作詞家が込めた思いや意図、時代背景などを理解し、実感を伴って受け取る必要がある。そこで、今回の実践においては、学生自身の生活の中で感じたことや思ったことを替えうたの歌詞にする体験によって、既存の童謡が作られるにあたって、作者が子どもたちに伝えたい思いや意図が存在していることを理解できるように工夫した。学生が等身大の実感をもって子どもたちに伝えることを自覚する事につなげるためである。

また、替えうたを作るに際し、原曲の思いや意図を解釈する活動を行ったが、実際に替えうたを作った後にも自分の替えうたを再解釈する機会を設けることで、フィードバックの効果を利用し、原曲の思いや意図に対する理解を更に深めることができるように授業を構築した。

今回、学生が歌詞を作るもっとも簡単な方法として、既存の曲の替えうたを作ることにしたが、この場合の替えうたの利点は、聞き覚えのあるリズムやメロディーのフレームが存在することにある。適度なゆるいフレームを用意することによって、遊び心から創作に取り組むことができる。また、基となる原曲の歌詞の内容が下敷にあるので、歌詞の発想が容易になる利点がある。

今回の実践で、この童謡を選んだ理由の一つとして、構造が単純である点が挙げられる。構造のわかり易さは替えうた作りを容易にし、その作り手に自由な発想を行う余地を与える。

今回は更に以下の3つのパターンの替えうたの方法を学生に提示し、活動を促した。

- ・前段を替え、後段をそのままにする。  
「○○なら手をたたこう」の○○の部分を作る。  
例えば「悲しいなら手をたたこう」となる。
- ・前段をそのままにし、後段を替える。  
「しあわせなら○○○○」の○○の部分を作る。  
例えば「しあわせなら踊りましょう」となる。
- ・前段、後段共に替える。

## 【アンケート2】

質問：自分以外の人を作った替え歌を見てどう思ったか？

回答（自由記述を内容ごとに分類し、回答数の多い順に上位5つの回答を並べる）
1 こんなにたくさんバリエーションがあってびっくりした。
2 実際に保育の現場で使うと面白そうだった。
3 替えうたに皆それぞれ個性が出ていると感じた。
4 生活習慣なども歌に乗せて楽しく学べば嫌になることもないなと思った。
5 同じ曲でも歌詞を変えるだけで全然違う曲になっていて面白いと思った。

リズムとメロディーラインを基にして、歌詞のすべてを替え歌にする。

②学生全員の替えうたを分野別の一覧にし、これを全員が鑑賞する。

替えうたをわかりやすく分析するために、遊び、運動、生活習慣、一日の生活、感情、表現、友達、行事、自然・動物の9つの項目に分け、学生全員の替えうたを一覧にした。全学生が全員の替えうたが載っている一覧を鑑賞した上で、自分以外の学生が作った替えうたについてのアンケートを実施した。

③原曲の歌詞の内容に対する理解を深めるためのアンケートを実施する。

原曲である本来の歌詞をかみくだいて解釈すると、前提としてみんなが幸せであり、幸せであるならば、幸せであることを、手を叩くことによって表現しようよ、という内容である。歌詞では幸せの具体的な内容を聴き手に提示していない。どのように幸せなのか、なぜ幸せなのかを省略する事によって聴き手が幸せであることがあたかも当然のような印象を与える。そしてこの歌詞を歌いながら手を叩くと、自分は幸せだと自覚してない人も、幸せであるという前提条件を満たしているように思えてくる。つまり自分は幸せだから手を叩いているのだという思いを起こさせられる。そのレトリックにこの歌詞の説得力の源があると思うのだが、ではその幸せとは何か？それは聴き手の想像にゆだねられている。そこで学生が原曲の思いや意図に対する理解を深めるために、替えうたを作った後に原曲を再解釈する目的

### 【アンケート1】

質問1：子どもにとって幸せとは？

回答（自由記述を内容ごとに分類し、回答数の多い順に上位5つの回答を並べる）
1 感情をあらわせる環境。みんなで泣いたり笑ったり自分の気持ちを表わせること、受け止めてもらえること。
2 当たり前な日常、生活。家族がいて友達がいて当たり前な日常が送れること。
3 愛されること。いつも近くに誰かが見守ってくれているという安心感があること。
4 家族の存在。
5 好きなことをする。

質問2：子どもにとって不幸せとは？

回答（自由記述を内容ごとに分類し、回答数の多い順に上位4つの回答を並べる）
1 理解者がいない。親や先生から見離されたり、友達と仲良くすることができない。
2 笑い合える喜びがない。
3 生活が送れない。
4 自由に遊べない。

で、学生たちが子どもの幸せについてどのように考えているかについてアンケートを行い、その答えを全員にフィードバックした。

## ②手作り楽器

造形の授業においては、表現の本質を考えることと、子どもの個性を理解することを重要視し、作り手のオリジナリティを大切にしている。従って授業で学生が作品を制作する際には既存のキャラクターの模倣や制作キットの使用を認めない場合が多い。

学生の中には苦手意識から自分の絵が「ちゃんとしたものではない」という意識を持っているケースがある。これは驚くべきことであるが「子どもに与える遊具や教具は、自分が描いたり作ったりしたものでなく、きちんと購入した既製品か、型紙等のキットを使って作ったものであるべきだ」という考え方である。

遊具や教具に対しては、購入することと手作りすることの意味や重さが、時代とともに変化してきているのかも知れない。たくさんの遊具や教具を安価で購入できるようになった現代において、手作りの遊具や教具は「購入できないので手作りするもの」ではなくなってきたのである。むしろ手作りの方が時間も費用もかかる場合もあり、既成のものより質が劣るものをわざわざ苦勞して自分で手作りにすることには、それなりの動因を必要とするのである。

学生たちにとって今回の直接的な動因は、授業の課題であるということだが、「替えうた」と同様に既成の楽器の「模倣」と「改変」を認めたことで、手作り楽器に関しても作りやすい環境を設定することができた。既に完成されたものを「模倣」したり「改変」したりする作業の中には、学びの要素が存在する。現在活躍する音楽家や美術家の多くが、子どもの時分に替えうたやラクガキをして遊んだ体験を持つだろう。今回の課題ではこのような体験の「遊び心」が学生の意欲となることをねらっている。

## ③演奏と発表

今回の実践では、替えうたと手作り楽器をどのような流れで発表することが学生たちにとって最も有意義なものになるのかを重要視した。

学生個人で作った替えうたを4人1組のグループでまとめ、1番から4番までの一曲にし、手作り楽器によるリズムアンサンブルを加えた。授業内において演奏を発表することで音楽と造形が同時に表現されるかたちになり、音と視覚の同時刺激で感動の効果を高めることをねらった。また、発表を通して自分たちの表現を「どのような形で誰に伝えるのか」を考える機会を設定することで表現の意味を考える二次的な効果に期待した。

発表の手順として、まず4人1組のグループを作り、学生全員の替えうたが内容的につながることに考慮しつつ4人の替えうた作品を並べ、グループごとに演奏をしていく。また、各グループのメンバーで手作り楽器を用いたリズムアンサンブルを作る。この際には以下の方法を守りながら作るようにし、グループごとのアンサンブルの調和を保つように配慮した。

- ・自分の順番がきたら自分の替え歌を歌う。
- ・楽器の部分にきたら、自分だけで手作り楽器をリズムパターンAで演奏する。
- ・他の3人は全員で考えたリズムパターンBを曲全体を通してキープし、演奏をする。
- ・替えうたを作った本人以外の3人は歌詞の手拍子の部分にある言葉をみんなで歌う。

### 3. 考察

替えうたの課題において「子どもにとって幸せとは？」という質問の回答として一番多かったのは「認められること」「受け入れられること」という内容であった。このことから多くの学生たちが家族や友人に存在を認められ、自分の気持ちや感情などを表現したいと思っていることを伝えた。また、それが受け入れられると幸せを感じているという傾向についても伝えた。これに対し「子どもにとっての不幸せとは？」という質問には「誰にも相手にされないこと」という意味合いの回答が多く見られたこともこの傾向の存在を裏付けていると考えられる。

平成23年度の実践においては93名中85名の学生が替えうたの中で「みんな」という言葉を使っていた。これは原曲の歌詞の影響も大きいと考えられるが、学生たちが一人ではなく複数での行動が幸せな状況であると考えていることを現していると言える。

学生が子どもに対して感じている「幸せであってほしい」という思いや、「こうあってほしい」という理想が替えうたを通じた表現のベースとなっている。だからこそ学生自信の体験や経験に基づいた「こういう歌を子どもたちに歌ってほしい」「こんな楽器を子どもたちに使ってほしい」「こういう歌を子どもたちとうたえたらいいな」という率直な思いが、替えうたの内容から読み取れるのである。この事実は、学生たちの保育者としてのビジョンが、替えうたを作るためのモチベーションに反映していることを示唆している。

子どもが自分の気持ちを表現した作品を自分以外の誰かに受け取ってもらうことは、保育の現場においては子どもから子どもへ、または子どもから保育者へ、という関係性の中で行われることが想定される。しかし、今回は実際に子どもと実践する機会が授業内で持てない分、表現の多様性を確保するため「保育者から保育者へ」という関係の中で行われる発表シーンを想定した実践を行った。クラス全員の替えうたが載っているプリントを配り、一覧を共有した活動は、このねらいによるものである。

【アンケート2】を試みて、自分以外の人がつくった替えうたについての感想を聞くと、一番多かったのは「こんなにたくさんのバリエーションがあってびっくりした」という表現の多様性に着目したものであった。これに類する内容の回答を以下に挙げる。

- ・自分の他にもまったく違う歌詞などがあり発想のすごさに驚いた。
- ・自分では全く思いつかなかったような歌詞がたくさんあり、思わず歌ってしまいました。
- ・一人一人みんな歌詞が違って、考えられている点がすばらしいと思います。
- ・自分以外の人発想を知ることができて良いと思いました。
- ・自分が思いつかなかった遊び（ジャンル）についての歌詞がよいなと思った。

これらの回答から、替え歌を集めると「発想に多様性が認められる」と学生が感じていることが分かる。前述の通り、幸せのモデルケースとして「みんな」というキーワードが多くの学生の間で共通した概念である一方、そのみんなが「どのようにしている」のが幸せの状態かという点については多様性を持っていることになる。

運動、生活習慣、一日の生活、感情、表現、友達、行事といった子どもの生活のあらゆる部分を想像させる幅広さを持ち、個別の体験を反映し、伝えたいことも違うということを読み取り、自分以外の人々が作った歌詞に対する驚きや興味を持っている状態がわかる。

表現の多様性の受容や理解の経験から、子どもの発想に対する興味や尊重の姿勢が生まれ、

子どもの多様な発想を受け止め、「だれかにわかってもらいたい」という子どもの気持ちをくみとる能力を養うことができるのではないだろうか。

手作り楽器の造形的考察においては、まずモデルとなった既存の楽器の種類に大きく偏りが出たことを挙げておかねばならない。演奏時のビデオ記録映像を確認すると、マラカスを模した手作り楽器が約半数にのぼることに気づく。その要因として、うたに合わせる楽器としてマラカスが連想しやすいものであったこと、また、比較的音量が確保しやすく、演奏が簡単でリズムをとりやすい楽器であることなどが可能性として考えられる。作品のイメージはそれぞれの替えうたのイメージに合わせたものとする条件を提示したことも、比較的簡単に大きな音（振動）を生み出すことができるマラカスに人気が集中した要因のひとつと考えられる。

マラカスを模した手作り楽器の外殻材料として用いられていたのは飲料や菓子の空き容器が多く、紙コップやトイレトーパー等のロール状芯材の使用も散見された。容器の中に入れて音を出す材料については、ビーズや米、豆、ドングリ、鈴、紙などいずれも身近な材料であるが多様なものが存在し、この材料の差異が楽器としての音色の差に繋がった。

その他の楽器では紙皿やプラスチックトレイを用いて太鼓やタンバリンを模したもの、廃材の凹凸を割り箸で擦るギロ状のもの、ゴムを用いた弦楽器様の手作り楽器なども見られた。授業内の聞き取りによると、マラカス様の手作り楽器が多い中でそれ以外の楽器を作った学生については「他の学生が作っていないものを作りたい」という明確な意志を持ったケースを複数確認することができた。

また、今回の課題における手作り楽器の造形的価値は、子どものために安全であり、見て、演奏しておもしろいものであるという点を重視したため、多くの楽器がカラーマーカーや色紙で装飾された。鮮やかな色彩や、楽器のフォルムを動物の姿に見立てたデザインなど、子どもたちをよるこばせようとする工夫がなされ、新たな発展のかたちを生み出した例もあった。例えば、装飾部分が他の楽器の外見や役割を持っていたり（トランペットの姿をしたマラカスでギロの機能を持っている）、手作り楽器自体がおもちゃとしてあそぶことができた（マラカスの中に入っている鈴を移動させてあそぶおもちゃ）ものなど、柔軟で独創的なアイデアを持った作品が作られた。

演奏と発表までの作業においては、学生同士の話し合いや練習がし易くなるように4人1組のグループ単位で行った。そして、一人一人が作った替え歌と手作り楽器を用いて、グループごとにリズムアンサンブルを作り、発表のための練習を重ねた。その過程で学生たちは自分以外の方がどのような発想を持って替えうたや楽器を作ったのかを知ることになる。

音楽や造形に共通する要素として、作ったものを受け手に伝えてはじめて創作が成立するという側面がある。作ったものを発表するまでの過程にある準備や練習といった労力が、発表によって人に伝わったことで初めて完成し、報われるからである。保育者は子どもの表現したい気持ちを、時には観客として受け止め、時には表現を共有する仲間として分かち合う役割を担うため、発表を通して様々な立場からの関わりを経験することが大切であるという認識を強めた。

音楽や造形の創作の過程で「自分の作品が鑑賞した人に認められる」「自分が創作したも

のを喜んでもらう」こと、そしてそれと対を成すように「自分以外の人の作品を鑑賞し、認める」「自分以外の人が創作したものを受け入れる」ことが次のサイクルへと繋がっていく。長い歴史のなかで、感受や感化がくり返されて芸術表現の活動となってきた事実を、今回は模擬的に授業の中で再現した。この模擬的な経験により、学生が高いモチベーションを持つことを証明するには継続したデータの収集と分析が必要であるが、基礎研究としての可能性は十分に認められる。

模擬的に作られた環境であっても、学生が自分の表現が人に認められるという体験をすることは、他人の表現を認めることを含んだコミュニケーションサイクルの一環であり、その経験が将来の保育に繋がっていくと考える。表現の理解が感動を生み、感動を伝えたい気持ちが表現へと繋がっていくのである。

※1 ここでは大量生産ではない表現のかたちを表す文字として「制作」を使用する。

※2 「しあわせなら手をたたこう」作詞：木村利人

#### 参考文献

レイ・スミス マイカル・ライト ジェームズ・ホートン『アートテクニック大百科』美術出版社 2001年